

足の外科を専門とする立場から、私の診療の工夫、若手に伝えたい教訓について述べさせていただきます。

足はヒトの体で唯一地面と接する器官である。したがって、足底にあるサインを見逃してはならない。それはときに、患者自身は訴えず、あるいは気づいていない。必ず、靴下を脱がせ、足底の皮膚の様子を観察する。胼胝はあるのか、どこにあるのか、骨性隆起と関連しているのか、痛みを伴うのか、をしっかりと観察し聴取する。当たり前のことだが、両足を比較するために必ず揃えて、腫脹、可動域、運動時痛、皮膚の変化、の左右差を観察する。さらに立たせて、正面、側面、後方から見比べる。さらに、足の診察では圧痛部位の同定は必須で、これで8割方は診断できるといっても過言ではない。それを可能にするのに必要なのは「解剖」である。

さいわい、足は皮下組織が薄く、皮膚から容易に骨・関節を触れることができる。表在から、どこに〇〇骨、〇〇関節、〇〇腱、〇〇靱帯、〇〇神経があるかを明確に知るべきである。圧痛部位の同定は正確な診断につながる。また、骨・関節の形状と大きさ、腱・靱帯・神経の走行を正しく知っていれば、手術での無駄のない皮切につながる。今では運動器の超音波診断がトピックであるが、いい加減な「解剖」の知識のもとでは超音波診断装置も無用の長物となるだろう。やはり整形外科医は「解剖」をおろそかにできない。手術前のシミュレーションでも、皮切の次に何の組織が出てきて、それをどちらによけると何が見えてくる——こうした日々の訓練が実際の手術では生きるわけだが、それも解剖の知識が正しくないと意味がない。是非、若手の先生方には、手術の前には今一度解剖学の本を見直してから手術に挑んでいただきたい。

解剖学をしっかり頭にたたき込んだら、その患者の画像を術前にもう一度見直し、皮切と展開はどうするのが安全で有効かを何度も何度も時間をかけて検討する。術後は、その進入路が正しかったのか、を繰り返し検証することをお勧めしたい。その繰り返し、積み重ねが大変重要で、それによって新しい景色がみえてくる。

是非、新しい景色がみえるまで、学びを積み重ねて欲しいと思います。

* 聖マリアンナ医科大学整形外科科学講座〔〒216-8511 神奈川県川崎市宮前区菅生 2-16-1〕Department of Orthopaedic Surgery, St. Marianna University School of Medicine

Author Hisateru NIKI